

「笑いに税がかかったらどうなるのか」

伊東市立対島中学校 3 年 日吉 笑瑠

もし笑うたびに税金がかかる世界になったら、あなたはどうするだろうか。友達とふざけて笑ったら十円、テレビなどを見て爆笑したら百円。そんな世界になったら、私たちはきっと笑うことをためらうだろう。

けれども、想像してみしてほしい。その「笑い税」で集められたお金が、病気で笑えない人たちのために使われるとしたらどうだろう。入院している子供達に本を届ける、独り身の高齢者に寄り添う場所をつくる。そう考えると、自分の笑いが誰かの支えになると思えて少し誇らしい気持ちにならないだろうか。

もちろん、実際に笑いに税がかけられることはない。だが、この空想を通して私は、税の本質に気づいた。それは「自分の喜びや利益の一部を、まだそれを得られていない誰かに分ける仕組み」だということだ。お金を払うこと自体が目的ではなく、そこから生まれる「つながり」こそが税の意味なのだと私は思う。

実際、今の税金も同じだ。私が払う消費税は、道路や学校、消防や救急に使われている。自分が直接そこに関わってなくても、必ず誰かの安心や笑顔を生み出している。つまり税は「見えない笑顔のリレー」なのだ。

もし笑いに税がかかる世界を想像して、私たちが少しドキッとするのは、笑うことがとても大切だと思うからだ。人が生きていくために必要なのは食べ物やお金だけではないと考えた。安心できる社会で、心から笑えることこそが、人間らしい暮らしの証なのだと思う。

だからこそ、税を考えるときに「取られる」と思うのではなく、「笑顔をつなぐもの」として考えてみたい。私が将来、税を納めるとき、そのお金はどこかで誰かの笑顔につながっているはずだ。

税は数字ではなく、笑顔の数で考えたほうがわかりやすいのかもしれない。そう思うと、ちょっとだけ「納税って悪くないな」と感じる自分がいる。

実際、私は学校生活の中で友達と笑い合う時間に何度も救われてきた。緊張したテストの前も、部活で失敗して落ち込んだときも、友達の一言に笑って気持ちが軽くなった。笑いには、人の心を支える力がある。だからもし「笑い税」があれば、それは単なる冗談ではなく、本当に人を救う仕組みになり得るだろう。

そう考えると、今の社会にある税も同じように、人々の心や生活を支える力を持っている。税金があるから学校に通える、困ったときには病院にいける。つまり税は「生活の安心を守る笑いの裏側」にあるものだ。

私はこれから大人になり、働き、税を納めることになる。きっとそのときは「お金が減る」という感情のほうが強いだろう。そのときに税は数字だけではなく、人の笑顔につながることを思い出し、ちゃんと納めたい。